



## Kobe University Repository : Kernel

Title	彙報：平成19（2007）年度 海港都市研究センターの活動
Author(s)	
Citation	海港都市研究, 3: 155-156
Issue date	2008-03
Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	publisher
URL	<a href="http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81000038">http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81000038</a>

Create Date: 2013-01-18



## 彙報

### 平成 19 (2007) 年度 海港都市研究センターの活動

平成 19(2007)年 4 月、神戸大学文学部の改組に伴い、「神戸大学文学部海港都市研究センター」は、「神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター」(以下、海港センターと省略)と名称を変更した。海港センターの場所は、文学部本館 2 階の合同研究室から、あらたに設置された「研究プロジェクト推進室」へと移り、活動面でも「海港都市」をテーマとした研究報告会「海港都市 colloquim」の開催や大学院共通科目の開講など、新しい試みに取り組んだ年度となった。

とくに後者については、後期に①「海港都市研究」と②「海港都市研究交流演習」(「海港都市研究交流企画演習」)を開講した。

①は、身近な「海港都市・神戸」をフィールドとして学際的に分析する手法を学ぶとともに、「比較」を通じて国際的な視野で研究を展開する方法を学ぶことを目的とした講義である。神戸が海港都市として成立する歴史的淵源、さらに欧米系(ユダヤ人を含む)、韓国・朝鮮系、中国系、インド系の人たちとの交流が織りなす明治期以降の神戸と、そこで育まれた文化や社会の独創性について、リレー形式で開講した。受講した大学院生からは、「神戸という港町に生きた人々の多様性を知ることができた」「自身の研究を世界史的視野から見つめ直すよい機会となった」といった意見も寄せられている。「海港都市」を基点として学際的・国際的な視点から分析することの学問的意義について、本講義を通して大学院生に伝えることができた。

一方②は、大学院生が専門分野の枠を越えて横断的に議論するなかで、自らの研究を学際的・国際的な視点から見つめ直し、同時に研究の意義を有効にアピー

ルする能力を養うことを目的として開講した演習である。これは 12 月に中国中山大学で開催した国際学術シンポジウム(後述)の準備報告会も兼ねたものである。演習では、事前に公募した報告予定者(研究員・大学院生)が、自身の研究テーマを「海港都市」もしくは「異文化接触」というキーワードに引きつけて考え、口頭でのプレゼンテーションを 3 度行い、専攻を問わず集まった教員・受講者と相互に議論した。参加した大学院生からは、専門分野外の研究を聞くことに対する抵抗感(時間的な制約)や「海港都市」というテーマとの距離感に戸惑う声も聞かれたが、一方で「人文学の多様な研究手法を知ることができた」「自分の研究のエッセンスを抽出するいい機会となった」「専攻とは異なる角度からの質問に答えることで研究の幅が広がった」といった意見も多く、本演習の高い教育効果が示された。

②を経たうえで、12 月 6 日・7 日の両日、中国中山大学珠海キャンパス国際学術交流センターにおいて、「東アジア海港都市の文化発展」国際検討会を開催した。これは、「海港都市」を多角的に考察するために、国境を越えた研究者同士の意見交換と、大学院生同士による研究交流を目的とするもので、今回で 3 度目となる国際学術シンポジウムである。今年度は、海港センターと中山大学、台湾海洋大学の共催となった。

シンポジウムは、大津留厚(神戸大学大学院人文学研究科教授、海港センター副センター長)「トリエステ、神戸、海港都市学」、陳春声(中山大学歴史系教授、人文科学学院院長)「媽祖信仰与明清时期粵人海上活動」、以上 2 本の基調講演から始まった。その他の報告者、および報告題目は以下の通りである。

1 日目、第 1 部は、森紀子（神戸）「山東開港と広東人」、劉志偉（中山）「広州隆記茶行史事拾零」、緒形康（神戸）「嚴復と籌安会問題再考」、曹家齊（中山）「宋代中央嶺南之間の文書伝通」、奥村弘（神戸）「開港場神戸からみた「清国人」認識」。第 2 部は、袁丁（中山）「1930 年代広東僑匯的流通与管制」、樋口大祐（神戸）「火野葦平在「広東」、孫宏云（中山）「中国近代政治学文脈研究之二：關於那特經的〈政治学〉」、林英（中山）「公元 1 到 4 世紀中国社会对地中海世界的認識和想象」、焦鵬（中山）「清代乍浦港的商業」。第 3 部は、濱田麻矢（神戸）「内助の功」という自己実現——表現主体としての許広平——、呉義雄（中山）「中国叢報与中国歴史研究」、大城直樹（神戸）「近代沖縄文化における「非＝日本」的要素の位相」、曹善玉（中山）「改革開放后東北三省朝鮮族の海外移民問題初探」、孫正權（神戸）「植民地朝鮮のネーション認識論理と民族改良主義の論理」。

2 日目、第 4 部は、添田仁（神戸研究員）「18 世紀後期の長崎における〈密貿易〉観」、人見佐知子（神戸研究員）「開港場・神戸と明治初年の売春統制策」、沖野真理香（神戸院生）「東洋／西洋における男同士の絆」、生田真澄（神戸院生）「ロシア帝政末期のムスリム知識人の倫理思想における家族と社会」、黄嘉琪（神戸院生）「第二次世界大戦前後の日本における台湾出身者の定住化の一過程」。第 5 部は、竹村亜紀子（神戸院生）「日本語における外来語アクセントの変化」、陳海忠（中山院生）「従民利到國權：論 1904-1909 年の潮汕鐵路風波」、楊培娜（中山院生）「“違式”与“定例”——清代前期広東漁船規制的变化——」、西敦子（神戸研究員）「明治初年の日本の琉球政策と東アジア」、陳景熙（中山院生）「徳教海外揚教与“香叻暹汕”貿易体系」。第 6 部は、



「東アジア海港都市の文化発展」国際検討会  
(2007 年 12 月 7 日 中国中山大学)

下鳳奎（台湾海洋大学）「日据時期台湾帽商在神戸的活動」、雪村加世子（神戸院生）「名誉革命戦争後のフランス海港都市におけるアイルランド人移民の活動」、陳博翼（中山研究生）「従月港到安海：地域与局勢」、岡本恵（神戸院生）「エルサレム賛美文学から見る中世ムスリムのエルサレム観」、肖榮（中山院生）「〈海業本草〉与六朝時期嶺南的医業文化」。

参加者は、両日とも 60 名前後であった。本誌に掲載した論文は、同シンポジウムにおける中山大学陳春声氏と神戸大学側の研究報告をもとにしている。

3 月 3 日ー 7 日、海外拠点大学において海港都市研究に関心を持つ若手研究者を対象として、日本で海港都市関連資料を収集するための補助を行う「資料収集・研究交流会」を開催した。中山大学（博士課程在籍）の曹善玉氏 1 名を招聘し、中国朝鮮族・在日朝鮮人などに関する資料の調査・収集の補助を行った。

(文責：添田仁)